

「遠い、日常「支援息長く」

子どもも強いストレス

ロシアの侵攻が続くウクライナの隣国ハンガリーの国境近くで、戦火から逃れた避難民の診療にあたった福岡市在住の医師・佐藤拓史さん(57)が現地の様子を語った。戦争による強いストレスで、特に子どもたちに腹痛などの様々な症状が出ており、「日常を取り戻すまで息の長い支援が必要だ」と訴える。

(手嶋由梨)

ウクライナ避難民診療の医師

佐藤さんは福岡県内の病院などに非常勤で勤める傍ら、国際医療NGO「AMDA(アムダ)」(本部・岡山市)の理事を務める。2016年の熊本地震の被災地やネパール、ハイチの災害発生地に赴くなど、被災者らを診療してきた。

今回はアムダと国際協力活動を行うNGO「TICO(徳島県)の合同医療チームの一員として、3月20日にハンガリー東部の村・ベレグスラーニーに入った。国境から約1キロの地点にある避難民向けのヘルプセンターに設けられた仮設

診療所などで診療にあたる中、日本時間の同30日夜にオンライン取材に応じた。

国境は多い時で1日1000人ほどが避難し、診療所には1日約20人が訪れた。徒歩で山を越え、川を渡ってたどり着いた人も多く、手や足は傷だらけで靴はボロボロだった。薬が切れ、糖尿病が悪化して手足の感覚がまひした人もいた。

20歳代の女性は右脚のふくらはぎの皮膚が大きくはがれ、化膿していた。首都



・キーウ(キエフ)付近でロシア兵に撃たれ、杖をつきながら約3週間かけて避難したという。この女性を含め、多くは感情をささず事実だけを話した。佐藤さんは「つらい思いをした人、こちらから聞くことはしない。ウクライナの人は我慢強いと感じた」と語った。

しかし、日常を奪われたストレスで様々な症状が表れていた。小さな女の子は診察で手を近づけただけで怖がって叫んだ。高齢男性は高血圧になって眠れなくなり、アムダが派遣した看護

師が足湯でマッサージをした。

佐藤さんは診療する中で、熊本地震の被災地を思い出したという。発生数日後から吐き気など消化器系の症状を訴える子どもが増えた。今回も腹痛や頭痛に苦しんでおり、「国内に残った父親とも離ればなれで、恐怖やストレスは相当なものだ」と胸を痛める。

国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)によると、国外に逃れた人は400万人を超えた。佐藤さんは今月3日に帰国。「戦況が落ち着いても、ウクライナに戻り、日常を取り戻すには時間がかかる。『復興』のその日までできることを日本の人たちにも考えてほしい」と話した。

ユナイテッド



国境近くの仮設診療所で避難民を診察する佐藤医師＝AMDA・TICO提供